

大正大學研究紀要 第 100 輯 特別号

2012-14 年度 大正大学—金剛大學校 国際学術交流

現代社会における仏教の諸問題

大 正 大 学

学術交流を深めて

——金剛大学校と大正大学の研究交流の意義——

平成二十六年十二月七日、第二回大正大学—金剛大学校・国際学術研究発表会が開催された。折しも、大正大学ですでに二十三回の実績を重ねてきた佛教文化学会学術大会と併催される形式であったため、仏教学や仏教文化を専攻とする若き研究者を中心に一般の方々も含めて、多数の聴講者を得て盛大な発表会となった。

今回の学術交流は、去る平成二十四年十一月十六日・十七日の両日に行なわれた第一回金剛大学校—大正大学共同セミナーに続くものである。この第一回セミナーは、金剛大学校の開校十周年記念として、金剛大学校の仏教文化研究所H K研究センターで開催されたもので、当時の学長であられた多田孝文大正大学名誉教授を中心に、大塚伸夫教授・元山公寿教授・曾根宣雄准教授・神達知純専任講師などが参加されて、大いに研究を深め、交流を温めたのである。

日本と韓国の仏教系大学の学術交流であるから、仏教の歴史・思想や文化・儀礼といった仏教学・仏教文化にかかわる研究分野の学術発表やセミナーであることはもとより当然のことである。しかし第一回・第二回とも、「現代社会における仏教の諸問題」という共通のテーマを掲げたことは、文献資料や歴史的史料をしっかりと把握した基礎的研究に基づいて、仏教全般や仏教文化の多様性を広く大きく捉え、現代社会のありようや現代人の社会生活とのかかわりにまで議論や考察を広げようという意図があるからにほかならない。

金剛大学校にもすぐれた大学の学風があり、大正大学にもこれまでの伝統に培われた学風がある。今回の試みも、まさにそうした両大学の特色や個性を生かして、仏教と仏教文化を中心とした歴史的営みや思想的営みを俯瞰しながら、現代仏教の問題点をも考え合い、話し合うことができる学術セミナーの時間と空間の構築を目的としているのである。加えて両大学の研究交流の絆をさらに深めるとともに、日韓両国の仏教や文化についての理解を共有し合うことを目指して、このたびの国際学術研究発表会の意義もおのずから見いだされるのである。

さらにいえば、このような交流の中で、研究者間の研究内容の発表報告や意見交換だけでなく、研究者同士の人間的交流や次の世代を担う後続・後輩の若い研究生や大学院生の研究交流の育成にも繋がって行くのである。そのようなことを求めて両大学が真摯に取り組む姿勢は、金剛大学校仏教文化研究所と大正大学総合仏教研究所の両所長以下、研究員・スタッフの諸氏の諸事諸般にわたる準備の努力に如実に示されている。

今回の報告書は、第二回国際学術研究発表会の大きな成果であり、寄稿された論考もすぐれた特色のある内容に結実している。大正大学としても、本報告書を大正大学の目指す国際文化交流への営みにおける一つの大切な実績・成果として捉えている。

最後に、感謝の思いを添えて、重ねて記させていただきたい。本報告書の刊行まで努力されてこられた両大学・両研究所の関係各位のご尽力に、深く篤い敬意を表させていただきたい。

大正大学 学長
勝 崎 裕 彦

目 次

巻頭言:学術交流を深めて……………	勝崎裕彦 (1)
——金剛大学校と大正大学の研究交流の意義——	
——大正大学——	
現代日本仏教の社会的役割……………	元山公寿 (5)
——“ Engaged Buddhism” をめぐって——	
仏教と現代日本の社会現象について……………	大塚伸夫 (13)
仏教とターミナルケア……………	曾根宣雄 (21)
——仏の救済をめぐって——	
これからの教化のありかた……………	神達知純 (31)
仏教に社会性はあるか……………	三浦 周 (39)
——19 世紀東アジアにおける排耶論を通じて——	
外来仏教の日本進出に関する一考察……………	星野 壮 (49)
地域変動と仏教寺院……………	名和清隆 (57)
——特に「過疎化」による寺院への影響——	
地方寺院活動における菩薩思想について……………	鈴木行賢 (67)
——金剛大学校——	
21 世紀の仏教……………	鄭 柄朝 (75)
仏教的生命観から見た胚芽複製問題……………	河 由真 (81)
仏教輪廻説が現代社会で持つ意義……………	崔 箕杓 (89)
華嚴学から見た通摂の実践……………	金 天鶴 (97)
他宗教に対する法華経の立場……………	河 栄秀 (105)
古くからの実践行、忍辱波羅蜜の現代的解釈……………	崔 恩英 (115)
仏教と自殺問題……………	車 相燁 (125)
——焼身自殺をどう見るのか——	
現代社会における仏教徒の個人倫理について……………	李 栄振 (131)
巻末言:仏教のころと福德(再録)……………	多田孝文 (141)

仏教のこころと福德

金剛大學校創立十周年に当たり、謹んで心からお慶び申し上げ、貴学の教育と研究の輝かしい成果に敬意を表します。両学校の交流がさらに進展し、大いなる福德あらんことを祈念します。

仏の教え

仏教はごく常識的な生き方を提唱した人生哲学と言える。

釈迦の生涯は多くの伝説に彩られるが、その一つに、生まれるとすぐに七歩あるき、右手を挙げて「天上天下唯我独尊」と言われた、というものがある。

この一文には、釈迦がこの世に出現した目的と教えが込められている。その教えとは、私たち一人ひとりの尊い存在とは、天にも地にも他と比べようがない唯一の存在であり、それ故に各々の内にある聖なる徳性を育み活動すべきである、というものである。

七歩とは、釈迦が一生涯にわたり、身命を賭して、苦悩する人々に向きあい教化したことを示している。

こうした尊い一々の存在を自覚し、常識的人生を実践するため、仏教は次のように諭す。

諸の悪を為す莫れ。衆くの善を行じ奉れ。

自が其の意を淨くせよ。是れ諸仏の教えなり。

(七仏通戒偈)

この一偈は、仏教の実践を示した根本的な教えである。

悪とは、自己中心的な言動をいう。すべてと共に生き、すべてのものに生かされてい

る自分を忘れてはならない。善とは、すべてのために生きることという。そのためには、自己の心を調べ、浄めておくことが大事である。これが諸仏の教えである。内容は非常に簡単なものであり、誰でも承知していることであるが、これを継続的に実行するのは難しい。

そこで釈迦は、このことを伝え諭すために、たくみな手立てを設け、智慧をふるい、忍耐強く、慈悲心をもって、つまりは対機の説法を、生涯を通じて全うしたのである。それらの教えは、八万四千の法門といわれ、あらゆる角度から真の人生、そのあるべき姿を説き示している。

人間とは何か

仏教では「一人の人は人間にあらず」と言い、人と人との間で人間になると教える。あらゆる存在とともに、生き、生かされていることを自覚せよと教えるのである。ただし、

「人生は意の如くならない。現実と思ひ願うところは異なり、苦と楽はいつも共にやってくる」(源信 942-1017)

私たちは、常に自分を中心に捉え、大事に生きたい、思い通りになりたい、とこだわっている。その度に、いかり、愚痴り、欲のこころを起こして悩み苦しむのである。思い通りにならない現実を認めたとき、他を知り己を知り、真の自分の成すべき最上の道が開ける、そのように教えている。その際に忘れてはならないことがある。

「恵みはすべてのものに平等にゆきわたっており、人々はそれを毎日つかって生きているのに、そのことに気づかない」

(智顗 538-597)

眼には見えないが、自分の回りにあるものすべては仏縁であり、それが私たちを照らし、いっそう輝きを増すように仕向けているのである。だからこそ、高ぶらず、謙虚であわてず、ゆっくり恐れずに、自在な活動にでるべきである。

仏教の世界観

仏教では、この世界を羅網にたとえている。羅網とは、網の結び目ごとに色とりどりの宝珠が連なっているものである。その大羅網がこの世界を覆っているとされる。青、黄、赤、白、黒など色々の宝珠とは、私たちのところである。網とは縁である。宝珠は、たがいに他を照らし合い、妙なる光明の世界を展開している。ただし、その内の一珠でも輝くことを怠るとたちまち網全体にその影響が伝わる。ここには支配者がいるわけではない。たがいにこだわらず平等の縁によって結ばれ、照らし、照らされている光明の世界なのである。どれか一つが自己中心的になると全体にひびく。一つは全体を照らし、全体は一つを輝かせる。このたとえば、私たちに平等の縁による調和の世界を提唱しているのである。

このあり方を詩の一節をもって説くことがある。「柳は緑、華は紅」という一節である。

花の紅が添えられるからこそ柳の緑がひときわ映え、柳の緑が添えられるからこそ花の紅も本来の美を際立たせる。

金剛大 schools と大正大学の交流も柳と華のようにあることで、仏天の加護をうけ、大いなる福德にあずかるものと確信している。

貴学の益々の隆昌を祈念します。

大正大学 名誉教授
多 田 孝 文

本文は、平成二十四年十一月に韓国・金剛大 schools で開催された第一回共同セミナーに際して、当時の大正大学学長多田孝文が寄稿した文章を再録したものである。なお、再録にあたっては役職名を変更（平成二十七年三月現在）している。

MEMOIRS OF TAISHO UNIVERSITY

(TAISHO DAIGAKU KENKYUKIYO)

Faculty of Buddhist Studies

Faculty of Human Studies

Faculty of Literature

Faculty of Communication and Culture

A Special Issue (No.100) March 2015

2012-14 International academic interchange by Taisho University and Geumgang University

Problems of Buddhism in modern society

CONTENTS

KATSUZAKI Yugen	
Introduction	(1)
Taisho University	
MOTOYAMA Koji	
A Social role of Japanese Buddhist Societies regarding the Engaged Buddhism	(5)
OTSUKA Nobuo	
The social phenomena and Buddhism in Japan	(13)
SONE Nobuo	
Buddhism and terminal care	(21)
KANDATSU Chijun	
The future model of teaching in Buddhism	(31)
MIURA Shu	
Does Buddhism have sociabilities? Regarding with Anti-christianity movement in East Asia in 19th century	(39)
HOSHINO So	
A Study on the expansion of Buddhism as a foreign religion into Japan	(49)
NAWA Kiyotaka	
Regional reformation and Buddhist temples —effect upon Buddhist temples on account of depopulation—	(57)
SUZUKI Gyoken	
The Bodhisattva concept in the regional temple activities	(67)
Geumgang University	
JEONG Byeong-jo	
21st Century Buddhism	(75)
HA Eu-gene	
A Reflection on the Human Embryonic Cloning from the Viewpoint of Life and Death in Buddhism	(81)
CHOI Gi-pyo	
The Significance of Buddhist Reincarnation Theory	(89)
KIM Cheon-hak	
A Study on the Practice of Interpenetration from the Perspective of Huayan Studies	(97)
HA Young-su	
The <i>Lotus-sutra</i> 's View on Other Religions	(105)
CHOI Eun-young	
A Contemporary Perspective on the Perfection of Patience, an Ancient Way of Virtue	(115)
CHA Sang-yeob	
Buddhism and Suicide - How do we understand the self-immolation?	(125)
LEE Young-jin	
Buddhist Ethics in Contemporary Society	(131)
TADA Kobun	
Conclusion	(141)

平成二十六年 度 学術委員会

委員長 元山公寿

副委員長 宮寄洋一

委員 木村秀明

木村周誠

松本一郎

西郷泰之

廣川進

内田英二

田谷修一郎

蛭田道春

寺田喜朗

福井淳

山田潤治

新谷高志

上村香織

平成二十七年三月十五日 印刷
平成二十七年三月三十一日 発行

大正大學研究紀要 第一〇〇輯 特別号

発行人 勝 崎 裕 彦

編集 大 正 大 学

東京都豊島区西巣鴨三丁目二〇番一号

印刷 株式会社ティール・マップ

東京都豊島区西巣鴨三丁目二〇番一号

東京都豊島区西巣鴨三丁目二〇番一号

発行所 大 正 大 学

電話 〇三(三九一八)七三二一(代表)